

# くものいと

第 5 号  
23-VII-1986  
関西クモ研究会

## 八木沼先生の新図鑑出版と 古稀をお祝いして

加 村 隆 英

八木沼先生の新しいクモ類図鑑が出版されました。まさに待望の書が出たといえましょう。旧版にくらべて原色図、部分図ともに、大幅に増えており、また、原記載以来採集記録がなく正体が明確でないような種も含め、日本産の全種の名が挙げられていることは、私たちクモ研究者にとって非常に便利で、ありがたいことです。また、最新の知見が数多く取り入れられていながら、従来の体系を極端に逸脱してはおらず、本書をもとに各人がいかようにでも発展させ得るように配慮されています。単に名を調べるための図鑑ではなく、これは旧版同様、「クモ学徒を育てるための書」であり、ここに八木沼先生のお人柄を感じる思いがします。本書の出版は昆虫研究者のあいだでも評判で、私どもの研究室でもひとしきり、話題になっています。

私たちはいい図鑑が出たと、ただ喜んでいただけですが、これだけのものをまとめられるにあたっては、私たちにはおもいもよらぬご苦労があったにちがひありません。これからは、わたしたちもいつまでも八木沼先生に頼ってばかりはいられません。未知の分野をどんどん明らかにしていけるようにがんばらねばならないと思います。

また、八木沼先生におかれましては、この図鑑の出版直前に古稀をお迎えになりました。心より慶び申し上げます。

これまでに何度か、八木沼先生のお宅に伺って、お話を拝聴したり、文献をコピーさせていただいたりしました。その度に、お忙しいところをお邪魔してご迷惑ではないだろうか、と恐縮するのですが、いつも快く迎えてくださ（6頁へ）

その後発表された中国のくもの新種

95. *Leptoneta microdonta* Xu, 1983  
(安徽省)
96. *Walckenaeria anceps* Xu, 1985  
(安徽省) *Walckenaeria*でなく  
*Argyrodes* と思われる。
97. *Clubiona fuzouensis* Gong, 1985  
(福建省)
98. *Chiracanthium fujianensis*  
Gong, 1983 (福建省)
99. *Leptoneta anocellata* Chen et  
al., 1986 (浙江省)
100. *Castianeira shaxiaensis*  
Gong, 1983 (福建省)

私の知り得た中国のクモの新種発表は100種に達した。これからもどしどし出てくることであろう。

著者の名が活字にないがあるので省いたが、必要な方にはお教えします。なお必要文献のコピーにも応じます。

中国に関する情報は学会よりも、むしろ八木沼研にはいるものが多いので今後はこの欄でお知らせします。

他に情報入手されたらお知らせ下されば、この欄で紹介します。

キタドヨウグモはMeta segmentata  
ではない

拙著図鑑には暫定的にMeta segmentataとして掲げたが、その後、欧州産の標本を入手して調べたところ、この学名が当たらないことを知った。恐らく新種になると思われるが、当分学名をMetleucauge sp. とされたい。真のsegmentataは今の分類では、Metellinaである。この二つの属のちがいは次の通りである。

Metleucauge 後牙堤歯が4、腹部は中央付近で幅が広い。

Metellina 後牙堤歯が3、腹部は前方で幅が広く、全体として小型  
なおこのほかに真のMetaに属する新種候補が四国徳島県の人工洞で坂東治男氏により採集されている。これもあわせて、何かに発表する予定である。

シノビグモの属まだ決まらない

シノビグモのタイプ標本が外国の大家三人を巡ってもどってきたが、誰もわからぬという。

発表に際してCispiusにもNilusにも似ており、思い切って新属Cispinilusとしようかとも考えたが、一種で新属を立てることを好まないで、もっとも近いCispiusに入れた。特徴全体から見ればTharassiusによく合うが、歩脚端にOnychium(肉趾)のあることがひっかかりどうしても、PisaurinaeとなりTharassinaeにはいらない。とにかく仮にCispiusとして今日まで来たが、属がどうも気にかかるのでPisauridaeの大家Carico博士(Linchburg大学)に聞いたが、見たこともない種で見当がつかぬ。Rhoicinaeに似ているから、そのクモを研究しているPlatnick博士(Amer.Mus.)に聞けば教えられるだろうとのことでPlatnick博士に送ったが、やはり分からぬとて、標本をこのグループの専門家Sierwld博士(ドイツ。当時アメリカのSmithsonian研究所に来ておられた)に転送された。その後Sierwld博士から原記載の注文があったので早速送りその結果を楽しみにしていたが、最近、属はCispiusではないようだが、何か見当がつかぬとて標本がもどって来た。こうなればこちらで調べ発表するより仕方がない。それまでは学名は今のままにしておく。

### ベトナムのハエトリグモの大論文が出た

ポーランドのハエトリグモの学者、Zabka博士がベトナムのハエトリグモ100種を記録発表された。東南アジアのクモの文献に飢えているわれわれにも有難い論文である。このうち新種51種、日本との共通種(旧北系、全北系、世界共通種を含めて)は約10種ある。日本の南部のもので名の分からぬものが、これでいくつかはわかるかも知れない。100種全種の詳しい美しい部分図と記載がある。学会図書にはいれば、整理つき次第お貸しできる。Zabka, M., 1985. Systematic and zoogeographic study on the family Salticidae (Araneae) from Viet-Nam. Ann. zool., 39 (11) : 197-485.

### 広島県のザトウムシ類(紹介)

鈴木正将, 1986. 広島県のザトウムシ類. 比婆科学, (132) : 7-45. 広島県産のザトウムシ24種の詳しい記載と図説。関西人のザトウムシ研究のよい参考になる。新種記載もある。

## 茶園のクモ類余話

奈良県立農業大学校 寺田孝重

### 第3話 ユウレイグモの謎

ユウレイグモの謎と云うのは、なかなかピッタリした標題と思われませんか？ユウレイのなぞであります。

茶園に特徴的なクモの一つにユウレイグモがあります。名前通りの白く細長い足を持ちゆっくりとした動作のクモで茶園のクモの中では比較的大きなものの一つです。

このクモは、茶園ではフ化直後の幼生から卵のうを口にくわえた成体まで、それこそあらゆるステージを見ることができます。

ところで皆さん、皆さんが草原や山林でクモ採集をされた時、ユウレイグモを大量にとられた経験がおありでしょうか。私は茶園の周田でよく採集をしました（茶園のクモと比較をするため）がそんなことは一度もありませんでした。これは不思議ではありませんか。こいつもまた奈良の茶園だけの現象とお思いでしょう。いいえ、これは三重でもそうなんです。

では茶園はこのクモにとって、そんなに住み心地が良いのでしょうか。たしかに、茶株の内部はうすぐらく、しかし比較的乾燥しており、小さな枝が錯綜し粗網を不器用に作るこのクモにとっては良い条件がそろっていますが、こんな環境だけなら、いろんな場所にあります。

そこで私はこんな仮説を考えてみました。

ユウレイグモにとっては、良い条件が茶園のように、カマボコ型に連続していることが重要なのではないか。つまりユウレイさんは、このような団地的要素に適応して茶園の優占種にまで成り上がったのではないのでしょうか。

このような仮説は、証拠をそろえるのがむづかしいんですが、株仕立になっていた中国の茶園からはこの種が出ていないことや、当農業大学校に昨年3月新しく植付けた茶園からはまだ（'86,5月現在）本種がでてこないことを傍証として提出しておきます。

（'86,5,29記）

## 「眞の分類学」

清水 裕 行

八木沼健夫先生が古稀の年にクモ図鑑の全面改訂版、『原色日本クモ類図鑑』を発表された。東亜蜘蛛学会50周年とあわせて実にタイミングよくおめでたいことである。先生の業績についてはここで今更述べるまでもないが、以外と見過がれていることがあると思うので触れさせていただく。

分類学者の仕事という一般に「新種を発表すること」と考えられがちであり、分類学者の中にさえ、新種をいくつ発表したかを分類学者の評価の基準にしようとするむきがあるという。無論、新種記載は分類学に不可欠のことであり、特にクモ学のように比較的遅れた分野においては研究活動の相当部分を占めているとあってよいだろう。八木沼先生も還暦を迎えられた時点で既に百種を超える新種記載をされていた。新種を記載すれば、常に学名の末尾に「著者名」がついてまわるので名誉なことに違いない。そのため、一部の学者の中で命名が自己目的化して、功を焦って新学名を乱発する傾向がなかったとはいえないであろう。

私が初めて先生のお宅に伺った時、「標本の同定が難行すると国内だけでなく外国の文献をいろいろあたらなければならない。時には地球の裏側のとんでもない地域から既に記載されていることがある。それでもわからなければ自分で記載しなければならない。」という意味のことを述べられた。「新種記載というのは分類学研究の結果の一つにすぎない。むしろ新種記載というのは“しかたなく”やるものである。」ときこえた。ミーハー的発想にとらわれていた私は内心恥ずかしく思ったものである。

標本が既存の種の中にあてはまれば、一旦それに同定する。なければ、(本当にはないかを確認した上で)新種として記載する。これは分類学の第一段階で最終段階ではない。当然、新種記載は最終目的ではない。記載された種を配列して属・科等の上位グループに整理して類縁関係を検討する段階で、従来の分類に疑問がわくことがある。その時は、記載を再検討するという作業が主になるが、根底には種に対する一種の哲学がからんでくる。結果が細分主義になったり包括主義になるのはこの違いによる。よく、分類の発展段階を $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ と分けるが、これはあくまで歴史的な発展段階で、個々の研究者の中では「個体発生は系統発生を」

何度も繰り返しているといえる。

八木沼先生は多くの新種を記載すると共に、相当数の種を消滅させてこられた。(その中には御自分で発表された学名も多数含まれる)例えば、キマダラオニグモをカラフトオニグモに、キスジキシダグモをアズマキシダグモに、ミズタコモリグモをクロココモリグモに統合し、シコクアシナガクモ、フタホシテオノグモ、ヨツボシワシグモは古い学名を再発見して置き換えておられる。このような作業は非生産的に見えるが、分類学が混乱なく発展するためには学名の整理が不可欠である。数値で分類学者を評価するならば、増やした種の数だけでなく減らした種の数もあわせて考えるべきである。

なお、学名の検討を分類学の枝葉末節と考え、系統に言及することこそ本質であると主張するむきがある。また、日本のクモ分類学の遅れをファウナの豊富さに求める説もある。「ヨーロッパではクモの種類が少ないので、早くそれらの記載が終わり系統の検討に移れた。日本では種類が豊富なのが裏目に出て、いまだに記載段階に留まっている。」というわけである。これらの意見に対しては「いきなり学問らしいことをしようとして基礎を軽んじたことが、かえって日本の分類学を遅らせる結果になった。」という八木沼先生の言葉で反論したい。学問の体系化とは情報の体系化に他ならない。分類学で扱う情報は生理学等に比べて多様で複雑である。不確かな情報に基づいて系統を論じても何等価値をもたないことは明白であろう。また、ヨーロッパのファウナを基にした分類体系はヨーロッパの中だけでの体系であって、決して普遍的なものではない。日本の学者が焦る必要は全くない。分類学者の他の分野に対するコンプレックスは解消して、問題点を正しく把握しなおすべきである。

---

(1頁より)り、そして、帰るときには必ず玄関まで出てこられて、「また、いらっしやい。」と言ってくださいます。私はいつもこの一言に安堵して、きょう伺ってよかったと思いながら、コピーさせていただいた文献をかかえて帰るのです。

八木沼先生、いつもいろいろとお教えいただきほんとうにありがとうございます。そして、これからもいつまでもお元気で、私たちをお導きくださいますようお願い申し上げます。

## ★地域のニュース★

### 但馬自然史研究所発足

但馬（兵庫県北部）の自然の研究・保護・教育に携わる人達の交流の場として、「但馬自然史研究所」が今春開設された。施設は研究室、ミーティングルーム、和室、図書資料室の4室のほかには浴室もあって合宿も可能である。運営は但馬を中心とした自然研究の諸団体（後述）の会員と研究所の趣旨に賛同する個人よりなる「友の会」によって行われる。機関誌として『但馬自然史通信』が不定期に発行され、通信費・年500円納入した会員に発送される。参加団体は但馬野鳥の会、但馬むしの会、但馬自然保護協会、但馬くさの会、兵庫陸水生物研究会、楽塾、但馬薬草農業クラブ、生物合同ゼミ等で、クモの研究者としては本庄四郎氏（事務局長）・山本一幸氏（世話人）が参加しておられる。自然史研究の諸団体が恒久的な施設を中心に結集するのは全国的にもユニークな例ではないだろうか。「関西クモ研究会」でもなんらかの形で参加・協力することを検討中であり、会員の一部からも有志で調査合宿をしようとの声があがっている。実行するとすれば、研究所の趣旨を十分に尊重して、クモを採って帰るだけでなく、地元還元（例えば子供との交流）する姿勢が必要である。

連絡先は本庄四郎氏（☎669-62 兵庫県城崎郡竹野町和田340 電07964-7-1041）



城崎郡竹野町竹野に五月上旬設立された但馬自然史研究所事務局長の本庄四郎さん（☎669-62）が「友の会」をこう話す。「動植物の宝庫の但馬で、自然にかかわる多くの団体がネットワーク化されたり。そんな夢がようやく実現したんです」。若き科学者たちが自由に寝泊まりでき、子供たちに自然のすばらしさを教えるための場所というのがこの研究所の趣旨。研究所建物は木造二階建て延べ約百七十平方メートル。研究室、ミーティングルーム、宿泊できる和室などがある。

#### 素晴らし自然を教えたい

「例えば野鳥の会の子がむしの会の人と話して、何か別の興味が湧いてくれれば……。僕らも後継者が育ってくれたらうれしいですよ。希望を熱く語る。三年前に自宅で開いた学習塾を、五月から同研究所に場所を移した。「生徒たちが研究所に出入りする多種多様な人を見て、勉強の方法が一つでないかわかってきたら……」。自らはクモの生態の研究を続ける。「この間、クモ取りに二時間付き合った子がいてね」とうれしそうに笑った。

『朝日』1986、6、5（第2兵庫版）

## 私の文献整理法

清水 裕 行

所蔵する文献の量が増えてくると、必要な記事がどこにあるかを速やかにかつ確実に検索するのはなかなか困難になる。筆者も標本の同定の度に図鑑や雑誌をひっくりかえす作業を繰り返してうんざりし、何とかもっと楽に探す方法はないものかと考えて試行錯誤の結果、現在のパソコン利用のシステムに到達した。この現システムと長年実行してきたカード利用の方法を紹介して、同じ悩みを持つ方々の参考にした。また、現システムは今後データサービスの形で利用できるようにしていくつもりである。

最初に手掛けたのは最も一般的なカードによる整理法で1972年頃のことと記憶している。原記載だけはすぐに検索できるようにしようと思いついたが、後に図のある文献全体に範囲を拡大した。索引カードとして科・属・種の3種類を準備し、まず科名カードを分類体系に従って配列し、次に属名カードを科名カードの後にアルファベット順に、更に種名カードを属名カードの後にやはりアルファベット順に配置した。属名・種名カードには学名・和名のほかに原記載のある文献名・シノニム（属名の場合には模式種も）を記入してある。文献カードには属または種名・著者および文献名・頁等を記入して発表年代順に属または種の索引カードの後に配置する。（図1）

文献カードはすべて現行学名の索引カードの後に置き、旧名称で索引した場合にはその索引カード上のシノニム一覧表を見て現行学名で索引しなおすことができるようにした。例えば、Nesticidaeの科名カードの後にはNesticusのほかにCyclocarcinaやSunitorypha等の属名カードを用意し、また種名カードとしてはNesticus akiyoshiensis, Theridion a., Cyclocarcina a.等実際に使用されたものはすべて準備する。アキヨシヒメグモに関する文献カードは現在のところすべてNesticus akiyoshiensisの種名カードの次に入れるが、仮に将来Cyclocarcina akiyoshiensisが使われるようになったら、そちらにすべて移さなければならない。最近では各文献カードの裏に図版のコピーをはりつけて同定の便を図った。

少なくとも日本産のクモについてこれらの索引カードが完備し、原記載や図鑑



等の重要文献のカードが揃っていれば当初の目的は達成されて、原稿を書く際の役にもたっていたであろうが、実際には始めてから10年以上たった現在でも未完成のままである。作業がはかどらない最大の原因は手数のかかることである。特に同じ作業の繰り返しが多いので根気が続かなくなる。八木沼凶鑑の新版を全部登録しようとするに「八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑」という語句を約千回書かかねばならない。これは片手間にやるには気が遠くなる仕事である。(BonnetやRoewerはあの目録を作る際に3万種について多分同様のカードを作成したものと思われる。一人の作業ではないのだろうが、驚くべき業績である) この問題を克服するためにコンピュータの活用を考えついた。個人でコンピュータを利用するなどとは、10年前だったらとても思いもよらないことだった。否、パソコンが普及しはじめた5年程前でもソフト面からの制約が大きく、オフコンの中古でも手に入れなければ無理だと思っていた。今では、ハード的にもソフト的にも当時のオフコンの能力をはるかに越えている。

コンピュータを利用した文献整理システムの利点は以下の通りである。

- (1) 入力楽である：キー操作に慣れれば、手書きでカードに記入するより作業のスピードが速い。作業の準備も簡単（電源を入れるだけ）なので、手軽にこまめにとりかかることができる。
- (2) 同じデータは1度入力すればよい：繰り返し使うデータはコード化して数字や略号などで表すことができる。文献データなどはプログラムの組み方によってはほとんど属・種名（これもコード化できる）だけを入力すればよくなる。
- (3) データの管理が楽である：カードを収納するために引出し式のスチールケースを1基購入したが、フロッピーディスク1枚でそれ以上の收容能力がある。従って、保管場所をとらない。また、カード方式では、抽出したカードは使用後もとの位置に戻さないと以後機能が大幅に低下する。コンピュータは読みこむだけなので、データが混乱することはない。学名の変更に伴う差換えも必要ない。
- (4) コストが安い：設備投資を別にとするとカード方式よりも安くつく。カードとフロッピーの値段から割出すと、データ1件につき約4分の1ですむ。時間と手間の節約まで考えるともっとコストダウンする。カード式の時は

扱うデータを制限してなんらかの記述を伴ったものだけに留め、目録に名のみあるものは除外していた。そうしないと、A t y p u s が1号出るたびに何百枚ものカードを必要とし、とても書ききれず管理も困難になる。新システムでは、とにかく名の出たものはすべて記録することができるので、分布資料等に活用範囲が広がる。

- (5) 編集能力がある：最大の特徴である。カード式では必要なデータの抽出がすんでも、それから原稿の執筆にかからなければならない。新システムでは、一覧表や目録程度のものならプログラムを組むことによって自動的に編集させることができる。(表1)
- (6) 公共性が高い：カードは同じものを他に提供することはほとんど不可能である。無理してコピーしたとしても他人のカードは活用しにくい。フロッピーに記録されたデータやプログラムは簡単にコピーでき、自分に合ったものに改造もできる。また、データ通信を利用して遠隔地にデータを送ることもできる。

具体的なデータの構造やプログラムの作り方は機械の種類やシステムによって異なるが、基本原理は共用できる。(筆者はP C 9 8 0 1とDB4を使用している) コンピュータ用語ではデータ群のことを「ファイル」というが索引カードに相当するデータ群は特に「マスター」という。コードを多用するのでそれを解読するためにマスターの種類は多くなる。コードの索引・書替えはプログラムによってコンピュータが自動的に行う。現在、科・属・種名の各マスターのほか著者名・論文・雑誌名のマスターを使用している。データの構造と例は次頁に示した。「文献ファイル」となっているものが文献カードに当たるもので、実際に使用するデータ群で、他はマスターである。

(コンピュータのクモ学への利用に関心をお持ちの方は御連絡下さい。意見や情報の交換をしたいと思います。

☎662 西宮市苦楽園四番町12-20 ; ☎0798-73-5936)

(科名ファイル)

Fコード [021]  
 FAMILY [Nesticidae  
 カメイ [ホラヒメグモ ]  
 所属 [ ]  
 区分 [J ]

(属名ファイル)

Gコード [021001]  
 GENUS [Nesticus  
 ソクメイ [ホラヒメグモ ]  
 FAMILY [021] ← Nesticidae  
 著者 [THO ] ← Thorell  
 年 [1869 ]  
 TYPE [021001001] ← N. cellulana  
 区分 [JY ]  
 現行 [021001]  
 備考 [ ]

(種名ファイル)

Fコード	[021] ← Nesticidae		[020] ← Theridiidae
Gコード	[021001] ← Nesticus	} 種コード	[020018] ← Theridion
Sコード	[006]		[031]
SPECIES	[akiyoshi ]	} 種	[akiyoshi ]
語尾	[ensis ]		[ensis ]
SUBSP	[ ]	} 亜種	[ ]
語尾 S	[ ]		[ ]
著者	[UT ]	} (Uyemura, 1941)	[UT ]
年	[1941 ]		[1941 ]
和名	[アキヨシホラヒメグモ ]		[アキヨシヒメグモ ]
区分	[JY <sup>®</sup> ] ]		[J ]
現行	[021001006]		[021001006]
備考	[ ]		[ ↑ Nesticus akiyoshiensis ]

(文献ファイル)

著者 [YT ] } 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑  
 年 [1986A ]  
 文区 [S]  
 GSコード [021001006] ← Nesticus akiyoshiensis (Uyemura)  
 P区 [P]  
 PAGE [ 54]  
 備考 [MDFJ ]

(論文ファイル)

著者 [YT ] ← 八木沼健夫 } 論文コード  
 年 [1986A ]  
 論文 [原色日本クモ類図鑑  
 区分 [LJ]  
 雑誌 [ ]  
 VOLNO [ ]  
 PAGE [1-305 ]  
 DATE [1986-02-28]

(著者ファイル)

Aコード	[YT ]	[UT ]
氏名	[八木沼健夫 ]	[植村利夫 ]
NAME	[YAGINUMA, Takeo ]	[UYEMURA, Toshio ]
AUTHOR	[Yaginuma ]	[Uyemura ]
備考	[ ]	[ ]

Nesticidae

① 索引カード I ..... 科

② 索引カード II ..... 属

Nesticus Thorell, 1869

ホラヒメグモ属

On Europe, spid., p. 88

Nesticus cellulanus (Clerck, 1758)

Nesticus Thorell, 1869

Gaucelmus Keyserling, 1884

Theidionexus Petrunkevitch, 1910

Ivesia Petr., 1925

Yvesella Arndt, 1928

Tuganobia Chamberlin, 1933

Eidmanella Roewer, 1935

Cyclocarcina Komatsu, 1942

Sunitorypha Komatsu, 1960

③ 索引カード III ..... 種

Nesticus akiyoshiensis

アキヨシホラヒメグモ

Acta arachnol., 6 (2) : 45

Theridion akiyoshiensis Uyemura, 1941

Cyclocarcina akiyoshiensis: Yaginuma

Nesticus akiyoshiensis: Yaginuma, 1959

Nesticus akiyoshiensis (Uyemura)

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.54, fig.29-1.

④ 文献カード

(図1) カード作成例

1	<i>Nesticus abukumanus</i> Yaginuma, 1979	アブクマホラヒメグモ
2	<i>Nesticus akamai</i> Yaginuma, 1979	トネホラヒメグモ
3	<i>Nesticus akiensis</i> Yaginuma, 1979	アキホラヒメグモ
4	<i>Nesticus akiyoshiensis</i> (Uyemura, 1941)	アキヨシホラヒメグモ
5	<i>Nesticus akiyoshiensis ofuku</i> Yaginuma, 1977	オフクホラヒメグモ
6	<i>Nesticus anagamianus</i> Yaginuma, 1976	アナカミホラヒメグモ
7	<i>Nesticus brevipes</i> Yaginuma, 1970	コホラヒメグモ
8	<i>Nesticus breviscapus</i> Yaginuma, 1979	アッカホラヒメグモ
9	<i>Nesticus bungonus</i> Yaginuma, 1979	ブンゴンホラヒメグモ
10	<i>Nesticus chikunii</i> Yaginuma, 1980	チカブホラヒメグモ
11	<i>Nesticus floronoides</i> (Komatsu, 1942)	ホシクワホラヒメグモ
12	<i>Nesticus floronoides komatsui</i> Yaginuma, 1979	コマツホラヒメグモ
13	<i>Nesticus floronoides notoi</i> Yaginuma, 1979	カンノンホラヒメグモ
14	<i>Nesticus floronoides tatoro</i> Yaginuma, 1979	タトロホラヒメグモ
15	<i>Nesticus furenensis</i> Yaginuma, 1979	フウレンホラヒメグモ
16	<i>Nesticus gondai</i> Yaginuma, 1979	クリスミホラヒメグモ
17	<i>Nesticus gujoensis</i> Yaginuma, 1979	クワシヨウホラヒメグモ
18	<i>Nesticus higoensis</i> Yaginuma, 1977	ヒコホラヒメグモ
19	<i>Nesticus iriei</i> Yaginuma, 1979	ソホホラヒメグモ
20	<i>Nesticus iwataensis</i> Yaginuma, 1979	イワテホラヒメグモ
21	<i>Nesticus kaiensis</i> Yaginuma, 1979	ホサツホラヒメグモ
22	<i>Nesticus karyuensis</i> Yaginuma, 1980	カリユホラヒメグモ
23	<i>Nesticus kataokai</i> Yaginuma, 1979	ヒノテホラヒメグモ
24	<i>Nesticus kuriko</i> Yaginuma, 1972	クリコホラヒメグモ
25	<i>Nesticus laticapulus</i> Yaginuma, 1972	サイコホラヒメグモ
26	<i>Nesticus laticapulus kosodensis</i> Yaginuma, 1972	コソデホラヒメグモ
27	<i>Nesticus linyphoides</i> (Komatsu, 1960)	ミヨウシンホラヒメグモ
28	<i>Nesticus longiscapus</i> Yaginuma, 1976	ナカエホラヒメグモ
29	<i>Nesticus longiscapus awa</i> Yaginuma, 1978	アワホラヒメグモ
30	<i>Nesticus longiscapus draco</i> Yaginuma, 1978	タツホラヒメグモ
31	<i>Nesticus longiscapus kiuchii</i> Yaginuma, 1978	キウチホラヒメグモ
32	<i>Nesticus masudai</i> Yaginuma, 1979	ミヤマホラヒメグモ
33	<i>Nesticus mikawanus</i> Yaginuma, 1979	ミカワホラヒメグモ
34	<i>Nesticus mogera</i> Yaginuma, 1972	チビホラヒメグモ
35	<i>Nesticus monticola</i> Yaginuma, 1979	シナノホラヒメグモ
36	<i>Nesticus nishikawai</i> Yaginuma, 1979	タシマホラヒメグモ
37	<i>Nesticus okinawaensis</i> Yaginuma, 1979	オキナワホラヒメグモ
38	<i>Nesticus rakanus</i> Yaginuma, 1976	ラカンホラヒメグモ
39	<i>Nesticus shinkaii</i> Yaginuma, 1979	トウキョウホラヒメグモ
40	<i>Nesticus shurei</i> Yaginuma, 1980	シュウレイホラヒメグモ
41	<i>Nesticus suzuka</i> Yaginuma, 1979	スズカホラヒメグモ
42	<i>Nesticus takachiho</i> Yaginuma, 1979	タカチホホラヒメグモ
43	<i>Nesticus tarumii</i> Yaginuma, 1979	オニホラヒメグモ
44	<i>Nesticus tosa</i> Yaginuma, 1976	トサホラヒメグモ
45	<i>Nesticus tosa iwaya</i> Yaginuma, 1976	イワヤホラヒメグモ
46	<i>Nesticus tosa niyodo</i> Yaginuma, 1976	ニヨトホラヒメグモ
47	<i>Nesticus uenoi</i> Yaginuma, 1972	フシホラヒメグモ
48	<i>Nesticus yamato</i> Yaginuma, 1979	ヤマトホラヒメグモ
49	<i>Nesticus yessoensis</i> Yaginuma, 1979	エソホラヒメグモ
50	<i>Nesticus zenjoensis</i> Yaginuma, 1978	ゼンシヨウホラヒメグモ

(表1) パソコンによる編集例

日本産のホラヒメグモをアルファベット順に配列したもの  
 もとのデータは11頁の「種名ファイル」の形で記録されている。

## ☆会務報告☆

〔例会〕 1986年6月8日(日) 11:00~16:00

追手門学院大学4号館

参加者：西川喜朗、金野晋、高田和代、福本伸男、座古禎三、田中穂積、  
四ノ宮靖大、加村隆英、清水裕行(敬称略・順不同)

内容： ①ビデオ上映

②講演1 - 加村隆英「日本のワシグモの数種について」(マエトビケム  
リグモの転属問題・親属を形成する数種・ヤマトウデブトグモ  
の正しい所属等。近く加村氏より正式な発表がありましよう)

③講演2 - 清水裕行「パソコンを利用した文献整理」(8頁参照)

配布： 「但馬自然史研究所」の新聞記事のコピー(7頁参照)

追手門学院大学文学部紀要「別刷」(追大で廃棄処分寸前のバックナンバーから西川氏がクモ関係のもののみ取り外したもので文字通りの「抜刷」部数も多く貴重なものでした)

### 〔目次〕

八木沼先生の新図鑑出版と古稀をお祝いして	加村隆英	.....	1
細蟹舎通信(8)	八木沼健夫	.....	2
茶園のクモ類余話 第3話	寺田孝重	.....	4
「負の分類学」	清水裕行	.....	5
地域のニュース・但馬自然史研究会発足	.....	.....	7
私の文献整理法	清水裕行	.....	8
会務報告	.....	.....	14